
聖戦

壬家修輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖戦

【Nコード】

N6962X

【作者名】

壬家修輔

【あらすじ】

今から5000年ぐらい先——。人間は統一されぬまま宇宙進出を果たし、互いに歩み寄り、離別し、対決し、争い、慰めあいながら進歩をつづけ、人間は遂に人工身体による寿命の半永久化と労働——と言ってもまだ一部——の完全機械化を成功させ、働かなくても食っていける世界が実現しつつあった。ところがそれでも人間は戦争はやめない。そんな世界に生きる厭世家の青年軍人のお話。

用語集（前書き）

随時更新していきます。

ちなみに劇中未登場の設定も登場します。この作品内における過去の事柄なども載せてゆきますので、これを見ればより作品を楽しめると思います。

用語集

国家

シュヴァイトーン連邦共和国 (Bundesrepublik

Sweillich B. R. S)

首都は自由の都星。
キャピタル・フライハイト

人口のうちゲルマン民族が約6割を占め、次いでラテン・チャイニーズが多い。

星暦245年に成立した連邦制国家。一時は銀河の約半分を領有するほどの強大な国家だったが、連邦参加国同士の利害調整や民族紛争などで徐々に衰退し、現在はかつての5分の1程度の領域ほどしかない。さらに連邦自体も現在にはほぼハイネベルク帝国による中央集権化が進み、連邦軍の約七割は帝国軍出身者で占められてしまっている。星間国家連合最高理事会の常任理事国。

エルヴァハイム王朝ハイネベルク帝国 (Elweheim-Dynastie Heineberg Reich E. D. H. R.)
首都はジーク・エルベルゼン星。

人口のうちの約9割をゲルマン系が占めている。

星暦140年に成立した立憲君主国。初めはただか3個星系を有するにとどまる弱小国家だったが、星暦237年に発生した？文明崩壊戦争（ツイフィリザティオン・ツザムンブルヒ・クリーク）？のころから急激に勢力を拡大し、星暦251年からシュヴァイトーン連邦共和国に参加し、縮小の一途をたどる連邦参加国の中で唯一勢力を伸ばし続け、参加国を吸収しながら徐々に国力を増幅させている。

ケルサデイム共和国 (Chelsadim Republic)

首都は新・天照星。
ノイエ・アマテラス

人口のうちの約5割がジャパニーズと最も多く、ついでゲルマンが約4割を占めている。

？大統一時代？の前から存在していたため、おそらく現代まで存続——とはいえ一度滅亡したもの——している国家の中で最古の共和国。

全宇宙の星間国家の中で最も工業化が進んだ国家だが、政治は腐敗し、賄賂・裏金・選挙違反が当たり前となっている。

航宙用語

立体座標

三次元型航宙戦闘に使用される地図。戦術AIや戦術コントロールシステムに搭載されている地図は主にこれ。

東 α 西 β 南 γ 北 δ

南東 $\gamma\alpha$ 南西 $\gamma\beta$ 北東 $\delta\alpha$ 北西 $\delta\beta$

上 χ 下 ψ

上南東 $\chi\gamma\alpha$ 下南東 $\psi\gamma\alpha$

上北東 $\chi\delta\alpha$ 下北東 $\psi\delta\alpha$

上南西 $\chi\gamma\beta$ 下南西 $\psi\gamma\beta$

上北西 $\chi\delta\beta$ 下北西 $\psi\delta\beta$

星間国家

通常、一つの星系または、星系全体に満たない領域の国家のことを単一星間国家と呼称する。

そして二つ以上の星系を有する国家を多星系国家と呼ぶ。

航宙戦艦

宇宙を航行することを目的とした宇宙船。

航宙母艦や砲艦、駆逐艦などの種類があり、ハイネベルク帝国航宙

軍ではそれぞれの戦艦に英雄の名やゲルマン神話の神の名を冠している。

動力源はハイパーイオンエンジンやロケット燃料、水素エンジンなど。

主な武装

N2ミサイル

無汚染の核ミサイル。戦艦の主要武装。

N2レーザー砲

無汚染の核エネルギーを利用したレーザー砲。戦艦の主要武装。

電磁バリア

物理的干渉不可能領域を大量の電力を使って発生させる装置。戦艦の主要武装。

レールガン

N2爆雷などを磁力で打ち出す武器。戦艦の主要武装。

N2爆雷

ミサイルのように指向性を持たないが威力が遥かに強い。大型戦艦などで利用される。

放射能照射器（条約により使用は禁止）

文字通り放射能を任意の敵に浴びせる兵器。非人道的とされ使用禁止となる。

通信ジャマー

電磁波などを発生させ、通信機器などを一時的に使用不可、または機能の低下をはかる。電磁波爆弾など

もこの機器によって管制されている。

熱核ミサイル（条約により使用は禁止）
無汚染処理をしていない核融合ミサイル。熱核兵器使用禁止条約・
地上非戦条約で使用を禁止されている。

熱核レーザー砲（条約により使用は禁止）
無汚染処理をしていない核融合レーザー砲。熱核兵器使用禁止条約・
地上非戦条約で使用を禁止されている。

劣化ウラン砲

劣化ウラン弾を射出する兵器。戦艦の主要武装の一つだが、一部の
国家では使用・所持を禁止している。

その他の用語

人工身体化

身体を人工の義手や義足に留まらず、体の30%以上を人工身体化
したものは基本的に第一種人工身体者、50%以上の人を第二種人
工身体者、80%以上の人を第三種人工身体者、90%以上の人を
特種人型機器使用者と呼ぶ。

序章（前書き）

この作品は私の処女作です。もしかしたら、いや間違いなく至らないところだらけの不出来な作品になってしまっていると思いますが、アドバースや感想を頂けると幸いです。

序章

人類は統一されることなく地球を出た。

それぞれの国家・勢力・機関が各々の方法を模索しながら、徐々に技術や科学の発展を目指し、時に協力し、離別し、争い、歩み寄り、さまざまな過程を経て、あらゆる技術が革新的成長を遂げ、人間は自然的な肉体を捨て、人工身体化や、ロボットとの接続、クローンへの脳の移植などにより、人間が永遠に近い寿命を得るほどになり、人々をさまざまなネットワークが繋ぎ、人間が一部とはいえ、労働を完全機械化し、働くことをやめ始めた時代。

星暦二二七七年。^{A.A.}時にこの年は、文明崩壊の年とも呼ばれる。

それまでの星間国家の崩壊と、異常なほど多発したテロ。

しかし、それらも時が経てば終わる。

結局、それまで数千あった国家は十数にまで減少し、いくつかの軍事独裁政権と連邦共和国、そして神聖国家、更には帝国主義国家から立憲君主国まで生み出した。

人類人口も、それまでの約一〇兆六〇〇〇億一七七万人から、約九〇〇〇億八〇〇〇万にまで減少した。

そんな数十ある星間国家の一、

「シュヴァイトーン連邦共和国（Bundesrepublik
Sweierll「B・R・S」）」

の連邦軍人、ライヒャルト・ローゼンミュラー少将は、若干二五歳にして既に将官になっている。

しかしこのエリート街道まっしぐらな男は、自他共に認める、？不憫な奴？だった。

この物語はこの不憫な男の半生のはなしである。

序章（後書き）

三日坊主の多い私がこの先、サボらず投稿できるんだろうか……？

第甲話（前書き）

いよいよ始まりました第一章！ 慣れないルビ振りに多少戸惑いました。この調子が続けばよいのですが……。

第甲話

突然だが、あなたはこの世のものではないもの、例えば幽霊や神、天使や悪魔、超常現象など、科学では説明のつかないものを信じるだろうか？

僕はどうしても信じられない。

所詮人間が作ったものばかりだ。

この世はそんな人工物で溢れかえっている。

神も法律も倫理も、果ては命という概念も。

こんな世の中の何を信じれば良いというのだろうか？ 人は生身の身体すら捨てたのだ。

僕のこの手足や頭や、内臓までも、人が作ったものなのだ。

もしかしたらこの自己までも、人によって作られたものかも知れない。

本当は僕のいるこの世界だって、誰かがコンピューターで作った、虚構の世界かも知れない。

ある日突然僕のとりにいた人が消え、僕の大切なものが跡形もなく消える。そして仕舞いには僕の生きていた証、僕の生きていた世界が、一瞬で消える。

僕が僕である証拠はどこにもなく、また、僕が僕でない証拠もどこにもない。

まず僕というものが本当に存在しているかも知からない。

人が人であることを証明することができない世界。

自殺しちゃいけない。人を殺しちゃいけない。人を傷つけちゃいけない。

弱者を救済するという名の下に行われる、自らに都合の良い思想統制と秩序の維持。

世界の連鎖の中に立っている——かも知れない——たった一人の小さな小さな自分。

僕は、僕。この僕という概念すら、人工的な概念であって、人や生物が必要性を認めて作ったものかも知れない。

何もかもが曖昧で、確實じゃない世界。

その曖昧も、その世界というモノすらも――。

シュヴァイトーン連邦軍第二方面軍副旗艦「アインス」艦橋。

「副司令。……アッヘンバツハ司令から指揮権委譲の通信が来ました」

ライヒャルトは通信部長の言葉を聞くと、昼寝をしようとしていた背中を起こした。

「……敵はケルサデйм共和国軍、総数二万八〇〇〇隻。それに対し我が方は、たったの一万三〇〇〇隻、援軍は約三日後。軍内部ではカールスゾーン星系の放棄案も出ている……これ勝てると思うか？」

ライヒャルトは副司令失格な質問をぶつけた。

だが、そもそもライヒャルト自身がこんなに昇進する気などなかったのだ。

（まあそんなこと人に言えるはずがないからな）

思えば？あの日？から、早一三年。ただ流されるままに過ごしてきた気がした。

「副司令、駄目ですよそんなこと言ったら」

通信部長は口を開かなくなった司令代理を見て苦笑しながら司令席を離れていった。

（だが、全員思っている事だからな）

第二方面軍は現在、かなり絶望的な状況に置かれている。

約二倍の敵に迫られ、さらに頼みの綱である味方は援軍の派兵の審

議中で分らないと言うのだ。

（本来ならばとつと逃げたいわけだが……）

ライヒャルトにはそうしたくてもできない理由があった。

シュヴァイトーン連邦は、その名の通りそれぞれ主権を持った国家の集合体である。

その中でシュヴァインフルト侯領カールスゾーン星系は、ハイネベルク帝国の貴族でこの地の領主であった、カール・フォン・シュヴァインフルト侯爵が統治していた領域で、現在は侯爵家が途絶えたため帝国政府が直轄領としており、第二方面軍の佐官以下の者たちはこの侯爵領の住民を中心に集めて、編成していたのである。

つまりこの地に家族や友人がいる者たちがほとんどなのだ。

しかしそれでも強制的に部隊を撤退させるだつてできるのだ。だが、このまま強制的に撤退すれば、間違いなくカールスゾーンの住民は二度とハイネベルクの統治を許さなくなるであろうことは明らかだった。

戦いたがる将兵たちがいて、土地には家族や友人や恋人を残してきている。それが今まさに自らの眼前で見捨てられようとしているのだ。

いくら国体至上主義で思想統制をしようと、一〇〇万人近くいる全ての将兵の口を塞ぐことなど不可能であつたし、またそのうちの何人かが反乱や亡命をして、情報を売り渡すかも分からないのだ。（所詮、司令なんて担がれているだけに過ぎない）

ライヒャルトは自分の置かれた状況について、そんな虚しさを感じていた。

「ニグブル参謀長、たしか会敵予想時刻は半日後だつたな？」

「はい」

ライヒャルトの隣で機械的な返事をした少壮の男——アロイス・ニグブル准将——は、エレクトロニック・ペーパー電子紙をサイドテーブルのパッドに収納すると、改めて「確かに会敵予想時刻は三日と半日後です」と言った。

「そうか、じゃあやはりする事は一つか」

そう言ってライヒャルトはおもむろに立ち上がり、戦術AIを起動させた。

『ライヒャルト・ローゼンミューラー帝国軍少将閣下。おはようございます。戦術AI エクスシア・ツヴァイ 起動しました』

ニグブル参謀長より遙かに人間らしい音声が届いてくる。

「敵行動予測、3・Aの詳細をコピーしてくれ」

ライヒャルトは右手を画面の操作に、左手を画面のついている小さな円卓のとなりの穴の開いた円卓に突っ込んだ。

『何指に記録いたしますか？』

ライヒャルトは声を聞いてから少し思案した後、「……じゃあ中指で」と言った。

画面に、コピーしています という注意が映る。

それから一瞬の後、注意書きは消え、コピー完了 という黒文字が浮かび上がった。

『コピー、完了いたしました』

ライヒャルトはその声を聞くと、中指だけ特に熱くなった左手をひっこぬいた。

そのまま席に戻ったライヒャルトは、中指の第一関節のボタンを押した。

「生体コード、確認」

『ライヒャルト・エドワルト・ローゼンミューラー帝国軍少将閣下』

ライヒャルトは右手で頬杖を突きながら、自らの人工眼球のスクリーンに画面を投影した。

「タイプ、RE・R32を起動。3・Aの戦術データを、方面軍艦隊コントロールシステムに適用」

『了解。高速化のため民間ネットワーク空間の借用が可能です。借用しますか？』

「しない」

機械とは例外なく無駄な質問を投げかけてくるものか、ライヒャルトはこのまどろっこしい機械に不機嫌になり、サイドテーブルの

紅茶を一気に飲み下した。

（第一、民間ネットワークに乗り上げた軍事システムがどんな目に遭うか、こいつが一番良く分かっているはずだろうに）

そうこうしているうちに、戦術コントロールシステムは戦術データのロードを終えていた。

『ロードが完了しました。全艦艇へ送信しますか？』

「送信」

ライヒャルトは紅茶を継いだ。

「ニグブル参謀長？」

ライヒャルトは、自席の隣で書類を読みふけている参謀長に話しかけた。

「なんでしよう、閣下？」

ニグブルは書類から目を離さない。

「私は逃げるぞ」

ライヒャルトはぼそりと言った。

「今なんと？」

ニグブルは不審そうな表情をした。

「逃げるんだ」

ライヒャルトは意地悪そうな表情をした。

「カールスゾーンの住民一億人を見捨ててですか！」

ニグブルは声を荒げた。

「別にそうは言っていないだろ」

ライヒャルトは席を立った。

「ではどういった意味で！」

ニグブルも立ち上がる。

「後で説明する……配置替えの準備を。副参謀長を呼べ」

第甲話（後書き）

次回をお楽しみに。感想・アドバイス、お待ちしております。

第乙話

「司令、このままやり過ごせるんですよね？」

カルステン・マイゼンブーク副参謀長は、軍帽を顔に被せているライヒャルトを揺り起こした。

「やり過ごすんじゃない。行方不明になるんだ」

ライヒャルトはぼそりと言った。

「でも……どうやって？」

マイゼンブークは首を傾げる。

「簡単だよ。危険宙域くわいいきに潜り込んで隠れば良い」

ライヒャルトは素っ気なく言った。

「き、危険宙域！ 無茶ですそんな、会敵する前に全滅してしまします！」

マイゼンブークの言葉を聞いたライヒャルトは、軍帽を退けると、「貴官も作戦に乗っただろ」と言った。

「しかし、詳細までは、そんな、危険宙域を航行するなどは、説明を受けておりません」

マイゼンブークは狼狽している。

ライヒャルトはため息をついた。

「詳細を聞かなかった貴官の非だ。……それに」

「……それに？」

マイゼンブークが聞くと、ライヒャルトは、にっと笑い、

「第二方面軍には、私が直々に育成した、ゲリラ戦のプロがいるだろ」

と言つて、再び寝始めた。

危険宙域——。聞いただけでもそこがどんな場所かは見当がつくだろう。白色矮星や太陽フレアの激しい地点、つまり航行不可能領域サルガッソー・スベが、カールスゾーンとケルサディム領をつなぐ回廊の両脇に、延

々と存在している。

通常、この領域に入るには相当な技量が必要で、ましてや師団などの大規模部隊の航行は、通信異常や指揮系統の壊滅などを引き起こし、自殺行為と言われている。

シュヴァイトーン連邦共和国首都星・自由の都、キャピタル・フライハイト統合参謀本部ビルの一室。

部屋に一人の男が入ってくる。

「アッヘンバッハ大将、今回はどうなさるおつもりです？」

男——マンフレート・エルメンライヒ連邦軍元帥——は、少し笑った。

「大丈夫です。今回は運が良かった。なんとって現場の指揮官は、ローゼンミュラーですからね」

アッヘンバッハはエルメンライヒに呼応するように微笑すると、事務士官が机にコーヒーを二つ置いた。

「？宿り木將軍？がですか？」

エルメンライヒはあざ笑うかのような表情をする。

「彼を知らぬものは皆そのように言います。ですが、小官の武勲の原因となった戦術は、彼が考えたものがほとんどですからね」

アッヘンバッハの言葉に、エルメンライヒは驚いた。

「彼が？」

エルメンライヒはカップを取る手を止めた。

「ええ、彼が」

「まさか」エルメンライヒがうわごとのように言うと、アッヘンバッハは、「本当ですよ」と、心外そうに言った。

シュヴァイトーン連邦軍第二方面軍には、ゲリラ戦のプロ集団がいる。
カイゼルス・ティーゲル

？皇帝の虎？そう呼ばれる第零施設科大隊には、シュヴァイトーン随一の宇宙船操舵士が集まっている。

しかしカイゼルス・ティーゲルには、施設科兵、つまり工兵は一人もない。

アッヘンバッハの許可を得てライヒャルトが設立した特殊部隊の一つであり、おもにゲリラ戦を行うことを目的としており、方面軍のゲリラ戦指導などもこの部隊が行う。

「リーデルハイム中佐。ローゼンミュラー司令代理から通信です。至急、旗艦へ来るように。上司には連絡済みである、とのことですよ。リーデルハイム、と呼ばれた大柄な中年男は、その狩りの最中のライオンのような、威圧的な目で通信士官を一瞥して、震え上がらせると、満足げな表情をして、一言、「あとを頼むぞ」と、副隊長に向かって言うと、副官を連れて艦橋を出て行った。

アインス艦内・第一小会議室に、二人の男が入ってくる。

大柄な方は？ 皇帝の虎？ 大隊隊長、リーデルハイム中佐。

ひよろつとした体型の方は？ 皇帝の虎？ 大隊参謀長、ラインシュタット少佐である。

「やあやあ？ 皇帝の虎？ みなさん」

ライヒャルトは陽気に言った。

「どうもこんにちは、宿り木司令代理」

リーデルハイムはさも面倒くさそうにしている。

「……キルンベルガー、状況の説明を」

ライヒャルトは少し不機嫌そうな表情を浮かべると、幼年学校以来の幼なじみの副官を見た。

「えー。敵は二個方面軍、一個師団。恐らく、有人なのは、二つの方面軍司令直属師団と、スタンドアローンの一個師団です」

ライヒャルトの副官の女性士官——マリアンネ・メイシュエ・キルンベルガー中尉——は、ゲルマンとチャイニーズの混血で、ライヒャルトと同じ年である。

キルンベルガーは、ライヒャルトと同期で連邦軍士官大学校を卒業した。

しかし、ライヒャルトが特殊参謀候補生として昇進スピードが早く、更にアッヘンバッハの副官になったのに対し、キルンベルガーは普通の航宙士官候補生で、昇進スピードもごく普通だったため、卒業から三年たった今、両者の差はかなりのものとなっていた。

「当たり前だ。そんなことは分かっている。小官も司令部の幕僚会議には参加しているからな」

リーデルハイムは、ライヒャルトのもったいぶった言い方に苛立ったような風だ。

ラインシュタットは、そんな上官を少し呆れたように見ると、本題に入ろうとした。

「ところで、司令代理。何か御用でしょうか？」

ラインシュタットの言葉を聞くと、ライヒャルトは顔をパツと明るくした。

「そう、そうだ。貴官等には特別な仕事があるからな、だから第零施設科大隊は、本日をもつて解散とする」

自らより若い、指揮官の声を聞いた二人は、ぽかんとした。

「はい？」

啞然とする二人を見たライヒャルトは、意外そうな表情をした。

「なんだ、そんな驚かなくてもいいだろう」

リーデルハイムは、明らかな反抗心を視線に乗せてライヒャルトを睨んだ。

キルンベルガーはリーデルハイムに険悪な視線を向けながら、

（あれが上官を見る目か）

と、慥然とした。

キルンベルガーは一步前に出ようとしたが、ライヒャルトはそれを手を突き出して制し、ライヒャルトは穏やかな口調で、「何か聞くことがあるのか？」と言った。

ラインシュタットが、律儀に手を挙げて、「あ、あのそれは、どういうことでしょうか？」と質問した。

ライヒャルトは、「やっぱりそうなるか……、設立の時に説明し

たはずなんだがな……」と言つて、おもむろに立ち上がった。そして、それまでの穏やかな口調を改め、表情を硬化させた。

「良く聞け、今から貴官らに、特命を言い渡す。今から聞いた事は部外者への口外は絶対厳禁だ。万が一口外すれば、その時は貴官らを軍法に照らして、厳罰に処する」

「はっ！」

二人は同時に返事をするに敬礼し、休めの姿勢から、気をつけ――拝命の姿勢――の姿勢になった。

リーデルハイムは顔を上に向け、ライヒャルトを見た。

リーデルハイムは一瞬ライヒャルトが歴戦の熟練した指揮官のように見えた。

連邦防衛省で安楽椅子に座つてふんぞり返る学歴と遺伝子頼みの役立たずとは違う、幾多の死線をくぐり抜けてきた者しか持てないリーデルハイムやその他のベテラン指揮官の貫禄を備えた表情を、若輩者と蔑まれる指揮官はしていた。

（ローゼンミュラーは、実はこんな若造などではなく、本当は顔を変えたベテランの軍人なんじゃないか）

そんな突拍子もないことをリーデルハイムが考え出したのは、この時からだった。

「旧第零施設科大隊長、及び参謀長は、現時刻をもつて私の方面本部付きとする。また、第零大隊航行士は、本部師団航行監督官として、第二方面軍全体の航行指揮権を一部委譲する。また、第零大隊普通科において小隊長以上であったものは、本部師団各連隊付きの作戦監督官に任じ、中隊レベルでの作戦の監督権を委譲する。輸送団において小隊長以上だった者は、本部師団輸送大隊及び連隊の幕僚として、輸送業務を監督させるものとし、輸送科への監督権を一部委譲する。その他の科に関しても後で詳細を送る。……以上！」

ライヒャルトは言い終えると、厳しげな表情を一変させ、再び穏やかで緩い表情をした。

「了解しました！失礼いたします！」

リーデルハイムとラインシュタットは敬礼し、会議室を出て行った。

二人が出て行った後、キルンベルガーは、リーデルハイムの視線に特に気づいていなさそうなライヒャルトを見て、ため息混じりに、「……閣下」と言った。

「何だキルンベルガー？」

ライヒャルトはキルンベルガーの呼びかけに答えたようだったが、すぐに後を続けた。

「あ、そうだお前」

「え、何ですか？」

まさか逆にライヒャルトが自分に話題を振ってくるとは思ってもしなかつたキルンベルガーは、あつけにとられた。

「他人がいない時はローゼンミューラーで良いと言つたろ」

ライヒャルトは、作戦の記されたエレクトロニックペーパーを手にとる。

「良いんですよ、別に」

キルンベルガーは何かにすねたような口調でライヒャルトの言葉を退ける。

「なんでまた、幼年から大学までずっとそうだったじゃないか」

ライヒャルトはエレクトロニックペーパーからキルンベルガーに視線を移した。

「それでも、です！」

キルンベルガーは机の上に乱暴に紅茶の入ったカップを置いた。

ライヒャルトは、突然声を荒げたキルンベルガーをほんの少し気遣わしげに見つめた後、静かに言った。

「貴官がそこまで言うなら良いんだが、……別に同期だし、幼なじみなんだから、そんな堅苦しくする必要はないだろ」

ライヒャルトには、何故キルンベルガーがそこまでこだわるのか、分からなかつた。

「何言ってんですか、中尉と少将、六階級ですよ六階級。何ですそれ、堅苦しくしたくないなんて、嫌味ですか？」

キルンベルガーは今すぐ自分の頬を殴りたくなった。

（あー、もう！ どうしてこう、本音と真逆の言葉が……）

ライヒャルトは、よほどキルンベルガーはそれが嫌なのだろうと思いい、「そんなに嫌だったのか、それはすまない」と言っただけ、黙り込んでしまった。

「あーあ」キルンベルガーの中のもう一人の自分が、呆れたように話し掛けて来た。

（……ほんと、何してんだかね……私）

キルンベルガーは心の中で自嘲の笑みを浮かべた。

「はあっ！」

キルンベルガーは何かに怒ったような声を漏らすと、目の前に置いておいた、本来ライヒャルトが飲むはずの紅茶を飲み干してしまった。

（こんなところに置いとく奴が悪いのよ）

それはつまり自分のことなのだが、そんな事は気にもしないキルンベルガーは、ふとライヒャルトの方を見た。

ライヒャルトは飽きもせず、作戦の書かれたエレクトロニックペーパーを見ている。最も、本人はこの確認作業にはとくに飽きていたが。

二人の間に、気まずい空気が流れ始めるのに時間はかからなかった。

すると突然、ドアを叩くような音がした。

「マイゼンブークです。司令代理、入ってもよろしいでしょうか？」

ライヒャルトは一言、「入れ」と言うと、顔を上げた。

マイゼンブークがいかに無神経というように入ってくる。そして部屋を見回すと、場の空気を察したように笑った。

「……おや？ どうされたんです二人共。普段はあんなに仲睦まじい夫婦みたいな感じなのに。もしかして夫婦喧嘩ですか？」

キルンベルガーは思わずマイゼンブークを睨みつけた。

それを見たライヒャルトは、「中尉、挨拶を」と、キルンベルガーに自重を促すことも兼ねて言った。

キルンベルガーは露骨な不満顔で、起立し敬礼をすると、ドシンと大きな音を立てて椅子に座った。

「それで、参謀長代理、私に何の用だね？」

ライヒャルトは二五歳らしからぬ物言いをする。

「はい。つい先ほど、旧第零施設科大隊員の再配置の作業が終了いたしました」

マイゼンブークはやつと終わった、という表情をした。

人事部を所掌する参謀長——代理とは言え——は、この再配置における責任者であるため、マイゼンブークはつい五分前まで人事に忙殺されていたのだ。

「そうか、良くやってくれた。しかし、それだけならば通信だけで良かったはずだろう。直接会う理由は何だ」

ライヒャルトは不審そうな表情をする。

「はい。少し、インターネットを介さずにお耳に入れておきたいお話がございまして」

マイゼンブークは言い終えると、キルンベルガーの方を見た。

「中尉、少し外していてくれ」

ライヒャルトはキルンベルガーを退室させると、マイゼンブークをきつと見据え、厳格な表情をすると、口を開いた。

「二特が何か掴んだか？」

マイゼンブークは、「はい」とだけ答えた。

二特というのは、第二特殊情報調査部の略で、第二方面軍だけが設置している、非公式の諜報機関である。

この組織の部長は司令代理のライヒャルトだが、実質上リーダーは参謀長で、マイゼンブークは不在の副司令代理のニグブルに代わり、参謀長代理を務めるため、マイゼンブークが現在ピア・ツヴァイを指揮している。

ビア・ツヴァイはハイネベルク帝国内の情報機関を隠れ蓑に活動する組織で、このビア・ツヴァイの活動によって得た情報をライヒャルトは、作戦などを立案・実行する際の参考としている。

「報告によると連邦軍統合参謀本部は、二個方面軍を援軍として送る、と公式発表したようですが、援軍の航行速度は極めて遅く、会敵予想時刻の翌日に到着するように仕組まれているようです」

マイゼンブークは苦い表情をする。

「つまり？領土と住民を放棄してとつと逃げる？つてわけか」

ライヒャルトは不謹慎な笑みを浮かべると、手元のエレクトロックペーパーを消した。

「ゼロ・アワーまであとどれくらいだ？」

「あと……二時間半ほど」

マイゼンブークが、自らの脳内に埋設されたマイクロコンピューターからの時刻のデータを投影する。

「……帝都のビア・ツヴァイのメンバーを全員召喚する。予備の全身人工身体を手配してくれ」

ライヒャルトはそう言うのと、まだ中身のあるものと思っていたデューカップを見て言った。

「何だ、誰だ私の紅茶を飲んだのは？」

第2話（後書き）

まだまだ続きます。次回をお楽しみに。感想・アドバイスもお待ちしております。

第丙話（前書き）

だいぶ間があきましたが、今回は二連続の投稿です。

第丙話

第二方面軍輸送科混成団旗艦、ローゼライヒス「帝国の薔薇」艦内。

「予備人型、一体いくついるんです？」

輸送科第零大隊長、ユルゲン・ガウス大佐がばやくように言う。
「彼らが要求する数だ」

ライヒャルトは、人工身体格納庫に並べられている人工身体たちを眺めている。

「また前みたいに一人で一〇体ぐらいぶっ壊す、ってことですかね？」

ガウスは皮肉のように愚痴を垂れる。

「閣下、ビア・ツヴァイのメンバーが来たようです」

キルンベルガーが持っていたペーパーコンピューターの画面を、ライヒャルトたちに見せる。

『第一から第二〇予備人工身体、起動準備。司令代理に起動許可を求めています』

どこからか電子的な声が聞こえてくる。

「全機、起動を許可する」

ライヒャルトが厳粛な口調で言う。

『了解しました。全機、起動』

声が聞こえた瞬間、ライヒャルトは即座に人工身体の一つに銃口を向けた。

ただし人工身体的位置は、起動前のハンガーから一〇メートルほど離れたライヒャルトの鼻先と、起動前と全く違ったが。

一瞬遅れて、他の人間たちがライヒャルトが銃を構えていることに気が付いた。

「ローゼンミュラー……！」

キルンベルガーは小さな声で「少将」と付け加えると、表情を凍らせた。

「心配するな、これが情報調査士官の挨拶の仕方だ」

ライヒャルトは笑うと、引き金を引いた。

バチツ、というレーザー特有の音がして、目の前に立っていた人工身体が倒れる。

「あー！ 何やってんですか、少将！」

ガウスが悲鳴にも似た声を上げる。

「ガウス大佐、まだ気づかないか。……こいつはマリオネットだ。あいつのな」

ライヒャルトは、やれやれ、というように言いながら、未だにハンガーに掛かっている人工身体を指差した。

「……え？」

その場の皆が、ライヒャルトの指差す人工身体を見つめる。

するとふいに、ハンガーから降りていた人工身体の口が開いた。

「どうもこんにちは、皆さん。……ご無沙汰しております、ローゼンミュラー少将閣下」

人工身体はそう言うのと、不敵な笑みを浮かべ、ライヒャルトの隣のキルンベルガーを見た。

「やあキルンベルガー中尉。少将とは順調かね？」

「順調、とはまた、どういった意味です、マルス？」

キルンベルガーは笑顔で言ったが、マルスの首に、ハイネベルク帝国軍人が必ず持っている装飾のナイフを突きつけていた。

？マルス？の人格の性別は、？一応？男であるとされている。

ピア・ツヴァイのメンバーは、チームごとに何らかのコードネームをつけられている。

マルスの所属する、国内チームにはローマ神話の神々とオリュンポスの神々。周辺国チームは、天使の名。遠国チームは、バーラトの神々の名が冠される。

ピア・ツヴァイそのものの人数は非公開だが、一説には一〇〇〇名を超えるとまで言われている。

「それはそうと、司令代理、なんでまた召集を？」

マルスは向けられたナイフを無理やり下ろさせると、ライヒヤルトを見た。

「それをここで言えると思うか？」

ライヒヤルトは拳銃を適当にいじっている。

「そりゃそうですね」

マルスはそう言うのと、後ろを振り返った。

「マルス、おしゃべりはそこら辺にしておけ」

キルンベルガーは、一瞬マルスと話し掛けた男が、どちらがどっちか分からなかった。

マルスと話しかけた男は、ほぼ同じ顔だった。

「申し訳ございません、副部長」

マルスは後ろに下がった。

「ユピテルだな。人工身体の顔ぐらい変えておけ」

ライヒヤルトがうんざりしたように言った。

「そちらの……女性士官は？」

ユピテルが不思議そうにキルンベルガーを見る。

「え？ああ、こいつはマリアンネ・キルンベルガー中尉だ。三年ほど前から私の副官なのだが……知らないのか」

ライヒヤルトが微笑しながらキルンベルガーを見ると、キルンベルガーは小さく一礼した。

「ええ、少し前までハインルにいましたから」

ユピテルは機械的な笑みを浮かべ、「それでは」と言って敬礼をすると、後ろに並ぶ部下を引き連れて去っていった。

「ガウス大佐、覚悟しておいてもらおう」

ライヒヤルトはガウスの肩をぼん、と叩くと、自らの乗艦であるアインスに帰って行った。

「リユッターズ総司令閣下、シュヴァイトーンの四個師団が突如、消息不明になりました！」

起きてから間もないリユッターズのもとに通信部長が駆けてく

る。

「……それはどういうことだ、自決なのか？」

リュッタースは席から身を乗り出す。

隣のヘルリヒも怪訝そうな表情で通信部長を見ている。

「いえ、まだそこまでは。しかし、熱源や、戦艦の残骸や破片は発見されておりません」

通信部長は、広い艦内を走ってきたために、息も絶え絶えになっている。

「では……どういうことだ、まさか奴ら、そのまま賊にでもなる気か。いや、ゲリラか？」

ヘルリヒは立ち上がった。

「総司令、一度、カールスゾーンの州都に三個師団を派遣しましょう。武力をもって正式に彼らの意向を聞き出さなければ、全く分かりません」

リュッタースはヘルリヒの言葉には首を縦に振らなかった。

「いや、我々は一個師団を擁している。どんな事があるかと、相手のたった五個師団では我々に何をするわけにもいくまい。問題はない、シュヴァイトーンの援軍も来る気配も無い、このままでいれば自ずと勝利は転がり込んでくる」

リュッタースはどこまでも慎重な男であった。

それ故、このシュヴァイトーンの間隙を突いた、誰もが求める勝ち戦の総司令を決める戦いで勝利してきたのである。

しかし血の気の多いヘルリヒには、リュッタースの慎重さがただの優柔不断のように見えて仕方なく、苛立ちを強めていた。

（仮にもケルサデウム共和国軍人が、臆病者か！これだからこの人は嫌なんだ！）

リュッタースとヘルリヒの立場が逆なら、ヘルリヒはとっくにものようにリュッタースを怒鳴りつけ、クビにしていたに違いなかった。

「しかし……しかし総司令、それではあまりにも、消極的過ぎるのでは」

ヘルリヒは、苛立ちを必死で隠すようにリュッターズに詰め寄る。

「兵をなるべく動かさずに勝つことが、最も良い勝ち方なのだ。勝ちが見えているのに、あえていたずらに戦力を分散させるべきではない。それこそ派遣した部隊が、ゲリラに襲われるとも限らん」

リュッターズはヘルリヒを、まるでエリートが不良を見るような目で見た。

ヘルリヒはたまらなく不快になったが、司令に逆らうことは、軍では絶対にありえないし、してはならなかった。下手をすれば殺されるのだ。監察部の許可と、司令部内での軍法会議の承認さえあれば、いつでも司令は部下を合法的に殺害できた。

しかしそんなことをすれば遺族への保障が発生するため、国防省の官僚と遺族二つの者たちから恨まれ、自らの評判を落としかねないため、実際に殺害する例は多くはなかった。だが作戦に強硬的に反発した参謀長が、実際に司令に罷免される、という事例は、かなり多いのだ。

「まあ、とにかく、情報収集は怠らないでくれ」

リュッターズはそう言うのと、「何かあったらすぐ呼べ」とだけ言い残して、アルテミス・ルームへと行ってしまった。

ちなみにアルテミス・ルームとは、従軍慰安婦、または慰安用ガイノイドが常駐する高官専用の娯楽施設で、ヘルリヒも何度か利用したことがあったが、「こんなことをしても士気は上がらん！」と今は利用をほとんどしていなかった。

「全くあの指揮官は……」

ヘルリヒはぼやくと、隣にいた副参謀長が、「仕方ありませんよ」と、半ば諦めたように言った。

戦艦アインス・第一大会議室。

「すごいですね彼らは、危険宙域の航行方法を完全に理解してます

よ。今のところ事故無しです」

マイゼンブークは感嘆の声を漏らした。

「ああ。なんとたって私が訓練のために、一ヶ月分の食糧を与えて、危険宙域に駆逐艦だけの艦隊で放り出したりしたからな」

ライヒャルトは笑いながら壮絶な内容を語る。

「あの時は酷かった。初心者ばかりで移動もままならなかった」

リーデルハイムも笑いながら自身の壮絶な過去を語り始めた。

「……で、司令、本気ですか？ケルサデウムへ侵攻する、って」

マイゼンブークが笑いを消す。

「ああ、もちろん」

ライヒャルトは大真面目に答える。

「しかし、敵が戦力を分散させたとして、援軍が来る前にカールスゾーンに敵軍が押し寄せます」

ラインシュタットが珍しく、ライヒャルトとマイゼンブークの会話に割ってはいいる。

「何か考えが？」

今度はリーデルハイムがライヒャルトを見た。

「もちろんだ。そのために二情^{ヒア・ツヴァイ}を呼んだ。彼らには情報の攪乱をしてもらう」

ライヒャルトはそう言うのと、立ち上がって、「さあ、もうそろそろ時間だ」と言って部屋を出て行った。

「……少将って変わってると思わないか？」

マイゼンブークがつぶやいた。彼は今年三二歳である。しかし階級は既に大佐——しかし現在は一時的に代将——で、ライヒャルトと同じようにエリートコースを辿ってきた男であった。しかし彼と違い、ライヒャルトのそれは、本人にしてみればいささか不本意なものだった。

「ええ、確かに」

ラインシュタットが、乱れた髪を撫でつけている。

「ああいう男は、誰かの上に立って物事を進めるのをあまり好まな

いはずだ」

リーデルハイムは適当に机上の飲料水を飲み干すと、席から立ち上がって部屋から出た。

ラインシュタットもそれに続く。

二人が出て行き、会議室にマイゼンブークとその副官だけが残る。

「あんたらも十分変わってるよ。いくら年下でも上官にため口利くとはね……」

マイゼンブークも足早に会議室を出て行った。

『リュッターズ総司令！ 行方不明の四個師団が、ローフェイ星系付近に現れました！』

アルテミス・ルームに特大のオペレーターの声が響く。

「ローフェイだと！ 虚報では無いのか！」

リュッターズは一休みしていた身体を起こすと、オペレーターの声に負けないぐらいの声で怒鳴った。

『至急、司令室までお越し下さい！』

オペレーターはそのまま逃げるように放送を切った。

「どうなっている……！」

リュッターズは一気に空気中の緊張感を増させた司令室に現れると、ヘルリヒ少将を呼び出した。

「なんでしようか閣下！？」

ヘルリヒはいかにも忙しそうにしている。落ち着きがない。

「少将、状況の説明を」

リュッターズはのきな口調で言ったが、帰ってきた言葉は陰悪だった。

「状況の説明……？ 今まで一体何してたんですか総司令！ 既にエーデルシュタイン副司令が、第一級非常事態宣言を発令してるんですよ！」

リユッタースはヘルリヒに気圧され、静かに司令席に座ると、周りを見渡した。

艦載の人工知能を中心に、人とロボットがあわただしく動いている。

リユッタースは報告のエレクトロニック・ペーパーを受け取ると、しばらく読んでいた。

読めば読むほど混乱してくる内容だ。

（シュヴァイトーンの意図はなんだ？ まさか援軍との挟撃を狙っているのか？）

「エーデルシュタイン副司令より通信！」

通信士官の声でエレクトロニック・ペーパーから目を離したりユッタースは、さも面倒くさそうに通信士官を見返すと、「繋げ」と短く言い放った。

艦橋のメインスクリーンに若い男が映る。

流れるような長めの金髪に、叙情的な濃灰の目をした白人——オスヴァルト・カスパー・エーデルシュタイン中将——は、敬礼を一つし、挨拶もそこに本題へ入ろうとした。

『リユッタース総司令閣下、臨時会議の召集をお願いいたします。シュヴァイトーン四個師団の逆侵攻など完全に想定外です。あの星系には戦力らしい戦力など配置しておりません。衛星兵器があっても一日足らずで陥落します』

今のリユッタースには耳の痛い話題だった。

「そんなこと分かっている。すぐに会議を開始する。貴官も副参謀長を連れてくるように。……良いな、切るぞ？」

リユッタースはこの耳に痛い話題を早く終わらせたいらしく、半ば強引に話を終わらせようとした。

『はっ！ それでは』

エーデルシュタインは律儀に敬礼を一つすると、通信を切った。「真面目なやつだな、エーデルシュタインの奴も……」

ヘルリヒは内心苦笑しつつ、机上のエレクトロニック・ペーパー

ーに目をやった。

（しかし……どうやって危険宙域を切り抜けた？　艦隊を丸ごとゲリラ化させたとしてもいいのか？）

「ハーストン、シュヴァイトーン第二方面軍を今誰が指揮を執っているか調べてくれ」

「はい」という機械的な声がして、すぐにデータがエレクトロニック・ペーパーに現れた。

『軍務省情報部（MMID）によると、第二方面軍司令官ジークベルト・フォン・アッヘンバッハ帝国軍大將は現在、連邦首都、キャピタル・フライハイトにあり、第二方面軍の指揮は副司令のライヒヤルト・ローゼンミュラー帝国軍少將がとっているものと思われる』

「二人ともハイネベルク帝国軍の所属か？」

ヘルリヒは持っていたエレクトロニック・ペーパーを置いた。

『はい。第二方面軍の約九割の將兵が帝国軍のようです』

「連邦軍まで帝国に侵略されてるのか。……ローゼンミュラー少將の経歴は？」

ヘルリヒはくつろぎながら聞く。

『一二歳で連邦軍士官学校を卒業。二三歳で連邦軍指揮士官課程に合格。同年アスペルヘルガー撤退戦で殿を務め、一個連隊で一個旅団を撃滅。大佐に昇任。二四歳でブルクヘン遭遇戦のハイネベルク側司令官を務め、敵二個旅団を殲滅。二階級特進で少將に昇任。二五歳でヘレーネスラント奪還作戦で首席幕僚を務め、作戦立案。現在に至る』

しばらくハーストンの声に耳を傾けていたヘルリヒは、表情を険しくした。

「……聞いてると人をどんどん不快にする経歴だな」

（こんな若造が俺と同格とは……）

まあそれだけの力量はあるのだろう。聞いたところ、ローゼンミュラーというやつは貴族ではないらしい。

「すみません。終了してよろしいでしょうか？」

ハーストンの声に顔を上げたヘルリヒは、「もう良い、終わりにしろ」とだけ言うと、席を立ってどこかへ行ってしまった。

ちなみに、ハーストンとは人名である。

ベルーナ・ハーストンというのが彼女の本名で、ハーストンはヘルリヒの次席副官を務めている。

過去、ケルン・クラフト原子力発電コロニーでのテロに遭い、脳と脊髄以外の全てを機械化したサイボーグで、普段はケルサデイムの首都、ノイエ・アマテラス星系にいる。ヘルリヒの不倫相手という噂の立つ、若い女性士官の少尉だった。

（今日の中将、何かおかしいような……）

ハーストンはその金属製の顔に機械的な困り顔を浮かべた。

第丁話（前書き）

連続投稿第二弾！

第丁話

ローフェイ星系^{シユタルナスシステム・ケー}州首都星区は、ケルサディムY方面では第二位の人口を誇る惑星である。

第二方面軍はこの星系で過去三回ほど艦隊戦を経験していた。

アインス・第二会議室前。

「衛星兵器、本当に墜とせるのか？」

リーデルハイムは、マイゼンブークへ詰め寄った。

「それは小官とて知りたいところだ。司令は作戦を開始直前まで誰にもしゃべらない」

マイゼンブークは視線を逸らした。

ライヒャルトは作戦の事となると急に寡黙になるのだ。

ケルサディムへの逆侵攻についてはむしろしゃべりすぎていたとすら言える。

「何をお話かなお二人とも？」

ライヒャルトがいつの間にかマイゼンブークの後ろに立っていた。

「しつ、司令代理……」

「^{ゼロ・アワー}作戦開始時刻まであと一時間だ。マイゼンブーク、話がある。少し第二会議室に來い」

ライヒャルトはマイゼンブークの肩を叩くと、そのまま近くの第二会議室に行ってしまった。

「……少将って神出鬼没だな」

リーデルハイムはつぶやくのを背に、マイゼンブークは第二会議室のドアを開けた。

「何です？ 話とは？」

ライヒャルトは部屋の窓から星々の浮かぶ漆黒の海を眺めている。

「マルス、帰隊報告は受けている。作戦の報告をしてくれ」

マイゼンブークの顔が悪戯っぽい笑みに崩れる。

「なんだ。お気づきだったんですか？」

マルスの悪い癖だった。マルスは必ず帰隊報告をしたあと行方不明になり、アッヘンバツハやライヒヤルトの近しい者になりすまして近寄ってくる。

「マイゼンブークから苦情が来たからな」

「はあ、そうですか。じゃあ今度はキルンベルガー中尉にするか…

…」

「おい。そういう問題か？ まあ良い、報告をとっとしろ」

ライヒヤルトはマイゼンブーク、いやマイゼンブークになりました
ましたマルスに振り返った。

また顔が変わっている。

「閣下、怖い顔をしないでください」

若い女性の甘えるような声を出したマイゼンブーク、いやキルンベルガーになりましたマルスは、体型まで見事に変えていた。

「……マルス、貴官に即応型形状変化の人工身体を貸与したのは悪戯をさせるためではないのは知っているな？」

ライヒヤルトは額に手を当てた。

（こいつ面倒くさい奴なんだよな）

こんな奴を諜報員にして本当に良かったのだろうか、ライヒヤルトは時折自信が無くなる。

「では早速、報告させていただきます……衛星兵器は地上一五〇キロメートル上に二四機が配置されています。N？レーザー一発を撃った後の充填時間は約一〇分。その間はレールガンやN？ミサイルによる攻撃を中心にして来る模様。衛星兵器一機が攻撃を受けると三分ごとに付近の衛星兵器が感応して、援護に来るようです。カメラ・サーモグラフィレーダー・対艦レーダー・迷彩破りを装備しています。現状は、ローフェイ星系州公安局が自動制御システムを起動させている模様」

ざっとこんなところです。とマルスは付け加えると、マルスは

それきり口を開かなかった。

ライヒャルトはしばらく黙って考え始めた。

「……惑星地表上の対宙兵器は？」
たいくう

「N？ミサイル群四〇〇機、対艦音響閃光弾一万八〇〇〇発、N？
レーザー兵器群三〇〇機です」
フレア・シフ

ライヒャルトは椅子に座り込んだ。

（なるべく兵器の破壊は避けたい）

それができなければ迎撃は不可能であった。

惑星の防衛兵器が全て手に入れば、四個師団で十分に六個以上の師団を迎撃できるのだ。

「隕石にひと手間加えるか……キル……あつマルス、ご苦労だった。
自室で休め」

ライヒャルトは敬礼を一つすると、部屋を出て行った。

「はっ！」

マルスは返礼すると、今度はニグブルの顔を作って笑った。

「……ふっふっふ、やっぱり間違えたか」

「キルンベルガー。ちょっと来い」

ライヒャルトは司令室に戻ると、自らの副官を呼び寄せた。

「何か御用ですか？ 閣下」

キルンベルガーがいつものように早歩きで近づいてくる。

「キルンベルガー、合い言葉を決めるぞ。私が薔薇、ローゼンと言ったら、
お前は粉屋ミユラーって言い」

キルンベルガーは怪訝そうな表情をし始めた。

「宇宙酔いでもしましたか？ 閣下」

「……あ、お前本物だろうな？」

ライヒャルトはキルンベルガーの顎を掴んで、ガクガクと上下に動かした。

「本物も何もまず偽物がないでしょうっ！」

キルンベルガーはライヒャルトの手を振り払った。

「よし、本物っぽいな。おい、気をつけろよ。この艦内にお前の偽物がいる」

キルンベルガーは「はあ？」という表情を満面に湛えてライヒヤルトを睨んだ。

「次やったら憲兵呼びますよ」

「本当に偽物がいるんだ！」

「嘘つかないで下さい！」

「こんなところで夫婦喧嘩ですか？」

マイゼンブークがキルンベルガーの肩を叩いた。

「違います！」

キルンベルガーが今度はマイゼンブークに陰悪な視線を送る。

「マルスの奴、今度はキルンベルガーになりすましがった」

ライヒヤルトは怒りを言葉の端々に滲ませている。

「あ、まさかお前マルスか！？」

ライヒヤルトはすっかり疑心暗鬼になっている。

「違いますよ。マルスの奴、今はニグブル参謀長になりすましてるみたいです」

マイゼンブークはライヒヤルトの耳元に小声で言った。

「本当か？ 今度見つけたら憲兵呼んでやる！」

ライヒヤルトは緊張感漂う司令室の中でただ一人叫び、ひんしゅく 顰蹙を買ったのだった。

「エーデルシュタイン副司令、会議のお時間です」

エーデルシュタインの副官、ソウマ・クロートヴィヒ大尉は、さつきから頭を抱えている自らの主を気遣わしげに見ている。

「できればこの作戦から降りたいんだが……」

エーデルシュタインは弱々しい声を漏らしている。

ここが私室で良かった、とクロートヴィヒは改めて思う。

（こんな光景を将兵に見られたら終わりだな）

「とにかく行きましょう。会議を提案したのは閣下なんですから」
「ああ、行くよ」

エーデルシュタインは重い腰を上げた。

コンコン、とドアが鳴り「オスヴァルト・エーデルシュタイン少将、入ります」という若い声が続けて聞こえてきた。
「入りたまえ」

リュッタースは威厳を微塵も感じさせない声を出した。

左側から順に、リュッタースの参謀長——つまりヘルリヒ少将——、副参謀長、作戦・情報参謀、各師団司令が並んで座っている。
エーデルシュタインは、敬礼をビシッと決め、椅子の左隣に立った。

「まあ、掛けてくれ」

リュッタースは怠惰の気分を隠そうともせず、むしろ誇るかのような態度をとる。

エーデルシュタインが座るのを待ってから、リュッタースは再び口を開いた。

「……で、少将、何か方策があるのかな？」

リュッタースはテーブルに頬杖をつき、卓上のアイスコーヒーのグラスに手を伸ばした。

（歳を食ってどんどんやる気が無くなって行ってるな、司令）

エーデルシュタインは余計に頭痛が酷くなり、水を飲もうと辺りを見回した。しかし、視界に飲料水は見当たらない。

（司令、自分の分だけ持って来させたんだな）

エーデルシュタインは心の中に一抹の苛立ちと憤怒が湧き上がるのを感じ、感情を抑えるべく息を一つ吐いた。

「敵艦隊はおそらく我々を挟撃するはずです。それならば、我が軍は早急に引き返し、ローフェイを奪還すべきです。そうすれば間違いなく敵四個師団の撃破が可能です」

リュッタースはエーデルシュタインを侮るような目で見た。

「少将、本気で言っているのかね？」

リュッタースは吹き出すのを必死にこらえているようだ。

エーデルシュタインはそれを見て、ただでさえ爆発しそうな感情を抑えるのにだいぶ労力を要した。

「少将、我が軍がこの状況で撤退するというのかね？ 戦術AIはそんなことは言っていないぞ。上位一〇位以内の行動推薦は全てカールスゾーンの占領が占めている」

エーデルシュタインはリュッタースの言葉を聞いて、心中舌打ちをした。

（あんな頭の堅くて目先のことしか言わないAIを信用しろと言うのか！？）

この時代の戦術AIの使用率はほぼ一〇〇パーセントと言って良い。だが戦術AIは過去の作戦や戦術を元に敵軍の行動を予測し、自軍にとって最善の行動を推薦するが、それは裏返せば、独創性や奇抜さの無い戦術ばかりとなる。

人間は新たなものを生み出すが、機械にはそれはできないのだ。例えばそれが培養細胞からできた脳髓を利用した量子コンピューターであつたとしても。

「しかし総司令、敵軍はかのローゼンミューラー少将に率いられています。彼は類い希な戦略家です」

エーデルシュタインにはだんだん今回の作戦が危険なもののように思えてきた。

「エーデルシュタイン少将、貴官がああのローゼンミューラーとかいう小僧を評価しているのは知っている。だが、帝国軍の者ではないか。コネと金があれば誰だって上へ上がれる」

リュッタースは笑顔を崩さない。だが、次第に右の口の端がつり上がり始めている。苛立ち始めた証拠だ。

「彼を過小評価するのは……」

「もう良い、エーデルシュタイン少将、貴官の意見、作戦の参考にさせて頂こう」

エーデルシュタインの反論は途中で封じられ、エーデルシュタインはリュツタースの説得をあきらめ、乗艦へ帰って行った。

「司令、エクスシア・ツヴァイはやはり衛星兵器・対宙兵器撃破率二〇パーセント以下の星系攻略は不可能、と判断したようです」

マイゼンブークはため息を一つ吐くと、ライヒャルトを見た。

黒髪に碧い目。人工身体ならではの美形の顔だち。白い肌。

しかしマイゼンブークは前々から、ライヒャルトの顔に違和感を抱いていた。

（この型の顔など今まで一度も見たことがない）

通常、人工身体の顔は微妙に変えられて作られているが、それでも九〇〇〇億人の顔全てが違う、というわけにはいかず、そっくりな顔の人工身体がいくつかあるものである。

？この世には自分と同じ顔が一〇〇人いると思え？などということわざができるほど、顔のほとんど同じ人工身体は存在している。

しかし、現代の人は会った人を生体コードで判別するため、何の問題もなかったが。

「そんな合金製の頭が言うことなど放っておけ」

ライヒャルトは見向きもせず、エレクトロニック・ペーパーで自らの立てた作戦の確認を繰り返している。

「しかし閣下、一応軍規上は戦術ＡＩの意見をもとに作戦を決定することが義務づけられておりますが」

マイゼンブークはまた始まった、と言うように肩をすくめた。

「参謀長、私は奇策奇計ばかりが最善の戦術だ、とは言わない。だが、堅実な策ばかり用いれば、その分柔軟な思考はできなくなるものだ」

ライヒャルトはそれまでのやる気のなさそうな表情を改め、真面目な表情になった。

「はあ……」

マイゼンブークは急に真面目になったライヒャルトに戸惑ったように、黙ってしまった。

「閣下、ユピテルたちが惑星への降下を成功させたようです」

今度はキルンベルガーがライヒャルトの席に近づいてきた。

「そうか。対宙兵器の完全な無力化は無理でも、一時的であればそれで良いからな」

独りでにつぶやいたライヒャルトは、軍服のジャケットを羽織ると、席を立った。

「どこに行かれるんですか、閣下？」

キルンベルガーが慌ててついて来る。

「通信室だ」

ライヒャルトは一言だけ言うと、士官専用の艦内移動エレベーターに乗り込んだ。

「ユピテルたちとの連絡ですか？」

「いや、アッヘンバッツハ司令と統参部の作戦局だ」

ライヒャルトは通信室のボタンを押すと、キルンベルガーの方を見た。

茶色がかったショートカットに、やはり碧色の目。そして薄く焼けたような肌。

まさにゲルマンとチャイニーズのクォーターという風貌だ。

「閣下、私の顔に何か？」

キルンベルガーが不思議そうな表情をしている。ライヒャルトは慌てて視線を逸らすと、「……何でもない」とつぶやいた。

アインス・第一通信室。

「これは、ローゼンミュラー司令代理」

通信一課長のプリングスハイム少佐は、視界にライヒャルトの姿を認めると、即座に敬礼を施した。

「ご苦勞様、プリングスハイム少佐」

ライヒャルトは挨拶もそこそこに、「首都と通信したいんだが」と本題を切り出した。

「首都とですか？ 分かりました。機密回線を使いますか？」

プリングスハイムは不審げな表情をした後、席に座っている部下に顔を近づけた。

「K S 2、30とK S、2 S Sの開設準備を」

「了解」

「……念のため、両方開いておいてくれ」

ライヒャルトは空席を見つけると、そのまま座った。

「閣下、何をされるおつもりですか？」

キルンベルガーはライヒャルトの横に立って資料を読んでいる。

「作戦局に文句を言う」

「はい！？」

キルンベルガーは主君の突然の発言に動揺した。

（文句を言うって……子供じゃないんだから）

「冗談はよしてください」

キルンベルガーは額に玉のような汗を浮かべてほほ笑む。

「あながち冗談でもないぞ。アッヘンバッハ大将から直々に、作戦局に対し援軍の即時到着をうながしてもらう」

ライヒャルトは真面目な表情をぴくりとも動かさず、淡々とした口調で言う。しかし、キルンベルガーにはそれ自体が悪い冗談のようにはしか見えなかったが。

「で、でも、できるんですか？ お上が決めたことですよ」

「いや、できる。この遅延は間違いなく参謀副総長の差し金だからな」

ライヒャルトは確信を持って言った。

「参謀副総長って、アレトゼー上級大将ですか？」

キルンベルガーは、統参部ビルで見た、あの意地汚そうなロマンスグレーの頭髪の老人を思い浮かべた。

「ああ。アッヘンバッハ司令を目の敵にしてる人だからな」

キルンベルガーは、何か言いかけたが、通信兵の「コンタクトが取れました」の声に阻まれ、ライヒャルトには届かなかった。

「機密回線でアッヘンバッハ司令に繋いでくれ」

ライヒャルトは立ち上がると、敬礼をする。

それから数秒後、画面に三十代後半ぐらいの男が映った。

『任務、ご苦勞様です。ローゼンミュラー少将』

アッヘンバッハは、堅苦しい挨拶に続けて、人懐っこい笑みを浮かべた。

「いえ、こちらこそ。指揮をとらせていただくとは、光榮の極みです、アッヘンバッハ司令閣下」

ライヒャルトはその笑みにつられることなく、真面目な表情を一切崩さない。

『ところで、いきなり大変な目に遭ってるそうじゃないか』

アッヘンバッハはまるで他人事のように言う。

「ええ、大ピンチです」

ライヒャルトは大まじめに言う。

『どうだ？ 何か策はあるか？』

アッヘンバッハはまるで、伯父が甥っ子に調子を聞くような口調で話す。

「ええ、まあ、あることにはありますが……司令閣下のお力添えが無ければ成し遂げられるかどうか……」

ライヒャルトの言葉を受けて、アッヘンバッハは怪訝そうな表情をしたが、一瞬の後、合点したように手を打った。

『援軍の催促か』

「ご明察です。どうか司令閣下からもなにとぞお口添えをお願いします」

ライヒャルトは苦虫をかみつぶしたような表情になる。

『分かった、今すぐにしておく。……で、いつ頃援軍が付けば良いんだ？』

アッヘンバッハの顔からだんだん笑みが消失してゆく。

「今すぐ、です。閣下」

アッヘンバッハには、ライヒャルトが一瞬口元をゆがめたように見えた。

『そうか。まあ貴官なら勝算もあるだろう。では、またな』

アッヘンバッハが敬礼をすると、画面に砂嵐が吹き荒れた。

「次、作戦局に公式回線で」

「はい」

通信兵が数分の間眼を閉じる。脳内に埋設されたマイクロ・コンピュータを使い、首都との通信回線のコンタクトをはかっているのだ。

「コンタクト、とれました。作戦局のβ方面参謀長のヴィリバルト・メンゲルブルク中将です」

ライヒャルトは、指先をそろえた右手を額に持っていく。

『ローゼンミユラー少将か。ついさっき、アッヘンバッハ大将から援軍の即時到着を要求されたが、あれはどういうことだ？』

メンゲルブルクは苛立ちを隠そうともせず、ライヒャルトを睨むように見る。

「言葉通りの意味でありましょう。アッヘンバッハ大将が戦局を危ぶまれたのではないでしょうか。ちょうど我々も、閣下に援軍の即時到着をお願いしようと思っていたところでした」

ライヒャルトは涼しい顔で嘘をついた。口角を吊り上げ、眼は優しさすら感じさせるほどの弧を描いている。

「……統参部の発表を見なかったのか！？ 無理だ。あれで全……」

「エクスシア・ツヴァイは、援軍が最大戦速で戦場へ到着すれば敵の撃退は可能と判断しています」

ライヒャルトは微笑を保ったまま、強い口調でメンゲルブルクの言葉をさえぎった。

メンゲルブルクはライヒャルトの顔を見て、一瞬後ろめたそうな表情をした後、ゆっくりと口を開いた。

「万が一の時は、アッヘンバッハ大将に弁護をしてもらおうというこ

とで良いか？」

「はい。もちろんです。これで勝利は確実なものとなりました」

ライヒャルトはにこやかに敬礼をすると、「では、職務が残っておりますので、お先によろしいでしょうか？」と問うた。

「あ、ああ。武運長久を祈る」

メンゲルブルクの慌てたような表情を最後に、画面は再び一面砂嵐となった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6962x/>

聖戦

2011年11月11日02時14分発行